

平成 30 年 6 月 11 日現在

機関番号：33902

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370839

研究課題名(和文) 第二次世界大戦期におけるイギリス帝国下諸地域の華僑動態研究

研究課題名(英文) The Activities of Overseas Chinese in the British Empire during the second World War

研究代表者

菊池 一隆 (KIKUCHI, Kazutaka)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号：00153049

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：第二次世界大戦期における華僑の抗日動態、ネットワークと断絶、移動に関しては不明点が多い。そこで、イギリス帝国下の南アフリカ、マダガスカル、モーリシャス、インド、ビルマ等各華僑に焦点をあわせ、実態解明に取り組んだ。その結果、南アフリカでは華僑や中国人海員の動向を探り、差別撤廃などでのインド人との連繫を明らかにした。マダガスカル、モーリシャスは移動、商品流通の重要な結節点であり、華僑、アラブ人、及び日本商品との関係を論じた。また、日本軍の攻撃によりビルマからインドとの華僑の移動と断絶を解明した。こうして、これら諸地域の華僑の動態、連繫と断絶を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：Historians have not given clear pictures of the anti-Japanese activities of overseas Chinese in the British Empire during World War . How did they conduct general anti-Japanese campaign, build communication network between them and move in such vast empire? Were there any rupture between them? In order to answer these subjects, I have made intensive investigations in such areas under the Empire as South Africa, Mauritius, Madagascar, Indo and Burma. As for the Chinese in South Africa, I attempted to research activities of Chinese or Chinese sailors and revealed their close coordination with Indians on the abolishment of racial discrimination. Regarding the Chinese in Mauritius and Madagascar, which were active trade centers in the Indian Ocean, I demonstrated the relationship between Chinese and Arab over dealing with Japanese goods. I have also made it clear that Chinese in Burma got disorganized and forced to move into India because of Japanese invasion.

研究分野：人文学

キーワード：中国近現代政治経済史 第二次世界大戦 中国抗日戦争 太平洋戦争 華僑 献金 日本品ボイコット 日本人

## 研究成果報告内容

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 華僑研究は経済、社会学などの方面で増大しているにもかかわらず、歴史学では清朝末期、孫文、辛亥革命、その後、一挙に戦後に飛び、第二次世界大戦期（以下、戦時期）については空白が多く、一挙に戦後に飛ぶ。また、地域的には東アジア、東南アジアが主に論じられ、欧州のみならず、アフリカ、ミャンマー、インドなどは皆無に近い。この重要時期、もしくは地域を除いては華僑史の全貌を正確に明らかにできないと考えた。

(2) 私はすでに戦時期における日本、台湾、朝鮮、アメリカ、カナダ、シンガポール、マラヤ、タイなど各華僑の解明を終え、著書、各論文で公表している。これらの研究を基礎にさらに地球規模での華僑の動態を本格的に解明するためには、イギリス帝国下諸地域、すなわち、イギリスを起点として南アフリカ、マダガスカル、モーリシャス、インドの各華僑の動態研究に関する先行研究が極めて少ないため困難は予測されるが、歴史開拓的に是が非でも取り組む必要を感じた。

### 2. 研究の目的

(1) 戦時期における南アフリカ華僑から着手する。ケープタウン、ヨハネスブルグ、プレトリアなど 3、4 地点から解明を進める。ここの金鉱などもあり、華工が多く、暴動を起こしたともいわれ、その実態解明を現地で進める。また、イギリスからの寄港地であり、中国人海員の視点からそれを押さえる。さらにガンジーなどインド人と

華僑が連携し、差別撤廃闘争をおこなった実態に迫りたい。

(2) マダガスカルはアフリカに所属するとされながらも実はアジアの先端的位置という極めて重要な位置にある。また、モーリシャスはマダガスカルとも近い位置にあり、華僑、アラブ人、インド人、そして日本人が商品流通を巡り、競争的關係にあった。これらを解明する史料は日本では皆無に近い。したがって、現地の史料や現地調査によってこれらを解明する。

(3) イギリス、南アフリカ、マダガスカル、モーリシャスと結びつく線は必然的にインドとの關係が浮上する。こうした研究は、日本においてはもちろん、世界的にも管見の限りない。したがって、東南アジアから見て重要なデリー、カルカッタ（現、コルカタ）、モーリシャス等から見て重要なボンベイ（ムンバイ）の 3 地点を設定し、戦時期華僑動態を解明し、さらにビルマ華僑との關係を考察する。

### 3. 研究の方法

(1) 日本、台湾、朝鮮の各華僑史研究『戦争と華僑』（汲古書院、2011 年）はすでに出版したが、それに続き研究を継続している国民政府・南京汪精衛政権の各華僑政策と北米華僑に関して、史料の補強、推敲を重ね、『戦争と華僑続編』（後述）の出版を目指す。

(2) 夏期休暇を利用して南アフリカの華僑関連都市ケープタウン、ヨハネスブルグ、プレトリアなどの各大学、各文書館、各国公立図書館、及び華僑街で史料収集する。また、華僑三世作家のメラリン・ヤップ（Melanie Yap）などに会い、情報を入手す

る。南アフリカの書店、古本屋を数多く訪れ、関連書籍、資料集を購入する。

(3) マダガスカル、モーリシャスで史料調査収集、および現地調査を実施する。夏期休暇を利用してマダガスカルのアンタナリボで大学、文書館、国公立図書館で史料調査、収集をする。また、モーリシャス大学、国立図書館で関係書籍を調査収集する。特に当地で華僑が出していた雑誌・新聞などを重視する。インドとマダガスカルの間に位置するモーリシャスの両華僑の戦時期における抗日動態は極めて重要である。

(4) まずミャンマー・インド両華僑に関する入手史料から分析を進め、不十分であるため、夏期休暇を利用してミャンマー、インドに行き、大学、図書館、華僑街、博物館などで新たな史料、補強史料を調査収集する。

未知の部分が多いが、南アフリカ、マダガスカル、モーリシャス各華僑との関係、共通性、差違などについて考察を深める。地道に現有史料で分かる範囲から研究を開始し、同時に現地史料を調査収集し、実証部分を強化、理論化し、次々と関連論文の発表を目指す。

#### 4、研究成果

(1) 拙著『戦争と華僑続編 - 中国国民政府・汪精衛政権の華僑行政と南洋・北米』（汲古書院、2018年5月、511頁）は全体の読み直し、推敲、新入手の史料により充実を図り、時間がかかったが、ついに完成させた。こうして、東アジア華僑に次いで、戦時期の華僑政策、南洋・北米華僑について2冊目の本格的な専門書を出版できた。

(2) 「第二次世界大戦時期の南アフリカ華

僑について」（以下、下記の発表論文等を参照されたい）では、華僑と中国人海員の抗日動態、またインド人と連携して差別撤廃運動をおこなったことを論じた。また、「万宝山・朝鮮事件における日本側報道とその特色」も関連論文で、マスコミの問題点と日本植民地下の朝鮮華僑弾圧を浮かび上がらせた。南アフリカ華僑とイギリスとの関連、南アフリカ華僑の背景である当地の状況や歴史的背景などについても史料も一定程度入手でき、理解を深めた。

(3) 「第二次世界大戦時期のマダガスカル・モーリシャス各華僑について」では、両地域の華僑について、その歴史的な背景を押さえた。華僑青年出版の『黎明』なども入手できた。マダガスカル、モーリシャス両華僑と南アフリカ華僑との関係、共通性、差違などについて考察を深めた。その結果、モーリシャスは意外なほど重要な位置にあり、かなりの中国人が入国、もしくは経過点としていたことが判明した。

(4) 「世界各地における華僑排斥と僑務委員会の華僑救済」を公表し、戦時期の世界規模での「華僑排斥」に関する論文を公表した。これにより華僑ネットワークや抗日・「親日」活動の研究をさらに深化できた。英帝国下の南アフリカ マダガスカル モーリシャス インド ミャンマーの華僑の移動・断絶を分析し、戦時期におけるイギリス帝国下、諸国、諸地域の華僑について研究面での実証、理論を深化させた。

(5) 科研関連報告(下記学会発表を参照されたい)としては、中国広州で国際学術シンポジウム『華僑華人与世界反法西斯戦争』で「日本政府・中国領事館・傀儡政権と華僑」を中国語で基調報告(7月25日)、

フランス・パリの国際学術会議（5th Congress of Asian & the Pacific Studies）で、“Japan Government, the Chinese Embassy, Puppet Government and Overseas Chinese in Japan”を英語報告（9月11日）。かくして、多数の大学教師、研究者などと有益な質疑応答ができた。多数の質疑応答から世界華僑の動態を深める契機となった。また、南アフリカではノースウエスト大学と公共事業研究所で華僑関連講演をおこない、質疑応答で当地での華僑、民族問題、歴史等に関する知見を得た。

（6）南アフリカで各種の華僑関係英文史料、新聞史料を多く入手したが、『僑声報』（ヨハネスブルグの華僑新聞）は戦後のものしかなかった。『僑声報』を探して当地の新聞社にも行ったが、倉庫が狭いため、戦時期のものは全て焼却されていた。モーリシャスの文書館は入出国目録を見せてくれたが、現物のコピーを拒絶（個人情報という理由で）され、私が目録の筆写したのも持ち帰ることが許されなかった。

（7）日本を中心とする東アジア、そして東南アジアの華僑研究がほとんどで、時期的には1920年代までと戦後が主流で、戦時期は不明点が多い。主な成果は、日本での研究の盲点を突き、戦争期と不明地域に焦点を当て、解明した点にある。今後の研究動向に遅かれ早かれ影響を及ぼす。海外においては、例えば南アフリカは白人・黒人問題に特化され、華僑研究は少なく、私の講演は注目を浴びた。モーリシャス、インド各華僑研究も歴史開拓的意義を持つ。予期していなかった知見は多いが、例えばマダガスカルは地勢的にはアフリカに属すが、文化、経済的にはむしろアジアの最先端に

位置すること。また、モーリシャスの地理的位置と役割の重要性を認識させられた。現在、すでにオセアニア華僑研究を開始しており、オーストラリア華僑については論文を発表した。これにニュージーランド華僑を加えて、最終的には世界華僑の戦時期動態構造を解明できればと考えている。

## 5 主な発表論文等

【雑誌論文】11件 うち査読論文計（1件）

菊池一隆 中国国民政府の戦時政策とタイ・北米華僑  
愛知学院大学『人間文化』査読無 31 2016  
pp.105-123

菊池一隆 世界各地における華僑排斥と僑務委員会の華僑救済 『愛知学院大学文学部紀要』査読無 45 2016  
pp.192(1)-173(20)

菊池一隆 1950年代台湾『白色テロ』と原住民 - 角板山と阿里山  
愛知学院大学『人間文化』査読無 30 2015  
pp.1-33

菊池一隆 台湾原住民の伝統生活と高砂義勇隊 - 台湾北部タイヤル族を中心に  
歴史学会『史潮』査読有 新 77 2015  
pp.47-66

菊池一隆 太平洋戦争後の日本軍の東南アジア占領と華僑の異動 - ビルマからインドへ 『愛知学院大学人間文化研究所報』  
42 査読無 2016 pp.1-3

菊池一隆 第二次世界大戦時期のマダガスカル・モーリシャス各華僑について  
『愛知学院大学人間文化研究所報』査読無  
41 2015 pp.1-3

菊池一隆 万宝山・朝鮮事件における日本側報道とその特色 『愛知学院大学文学

部紀要』査読無 44 2015 pp.350(1)-323  
(28)

菊池一隆 台湾北部における日本討伐  
隊とタイヤル族 - 対日抵抗と「帰順」 愛知  
学院大学 『人間文化』 査読無 29 2014  
pp.19-32

菊池一隆 第二次世界大戦時期の南  
アフリカ華僑について 『愛知学院大学人  
間文化研究所報』 査読無 40 2014、 pp.3-6

【学会発表】計 5 件 うち招待講演 計  
5 件

菊池一隆 Japan Government, the  
Chinese Embassy, Japan Puppet Government,  
and Overseas Chinese in Japan (報告) 5 th  
Congress of Asian & the Pacific Studies  
Inalco 2015 年

菊池一隆 日本、中国大使館、傀儡政  
権と日本華僑 - 抗日と“親日”  
「華僑華人与世界反法西斯戦争」国際学術研  
討会(基調報告) 2015 年

菊池一隆 台湾原住民の伝統生活と高  
砂義勇隊 第 39 回歴史学会全国大会(招待  
講演) 2014 年

菊池一隆 My Research of  
Overseas-Chinese History and the Vision  
NORTH-WEST UNI, Faculty of Humanities(招  
待講演) 2014 年

菊池一隆 My Research of  
Overseas-Chinese History and the Vision  
Public Affairs Research Institute (招待講演)  
2014 年

【図書】計 2 件

菊池一隆 集広舎 台湾北部タイヤル  
族から見た近現代史 2017 353

菊池一隆(張新民編訳) 稲郷出版社(台  
湾) 東亜歴史教科書問題面面観 2015  
479

## 6 研究組織

### (1) 研究代表者

菊池 一隆 (KIKUCHI Kazutaka)

愛知学院大学・文学部・教授

研究者番号 00153049

### (2) 研究分担者 無

### (3) 連携研究者 無